「時を見分ける」（ルカによる福音書一二章四九～五九節）

1　火を投ずるため

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである」。この衝撃的ともいえる言葉から、今日の箇所ははじまっています。

これだけ読むと、これは、一般のイエスのイメージからは出て来ない、むしろ正反対の言葉です。

しかし、間違いなく、これはイエスの言葉です。ヨハネによる福音書には、わたしは「裁く」ために世に来たという言葉もあります（九・三九）。イエスは罪人を招くために来た（ルカ五・三二）、失われたものを探して救うために来た（一九・一〇）というだけではないのは確かです。

これを私ども、どのように理解すべきなのでしょうか。一方で、イエスによって地上に火が投げ込まれ、この世に「分裂」がもたらされると言われます。他方でイエスは人を救う神の子です。矛盾した、不一致なことを、イエスが言いっ放しにするということなど、ありえないとすれば、その真意は何なんだろうかと、私どもは問わざるをえないのです。

> わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼（バプテスマ）がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ（四九～五一節）。

この段落の最初の言葉は、元の文では「火」という言葉からはじまっています。「火」が強調されているのです。

「火」は私どもの生活と切り離すことはできません。火を使う動物が人間だといわれるゆえんです。聖書でも、創世記から黙示録まで、あらゆる場面で火が登場いたします。私どもも参照すべきなのでしょうけれど、今日は触れることはしません。今日の箇所でこの「火」は、いまあるもの、汚れたものを焼き尽くす、滅ぼす、という意味で使われています。それは、浄（きよ）める、ということでもあり、そこから新しい力が生れ出るということでもあります。

「地上に火を投ずるため」に来たと言ったイエスは、また「その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか」とも言っています。まだ火は燃えていないのです。しかし、すでに燃えていて、その火を、ご自分の働きによって、引き継いでいくという状況だったら、どんなによかっただろうかというのです。それはイエスの深い嘆きです。

こうイエスが言うのは、そこには、その人々によって火が燃やされることを、期待していい人たちがいたからです。ユダヤの宗教の指導者たちです。祭司や、ファリサ

イ派の人々、あるいは律法学者も、そういう意味では期待していい人々であったに違いないのです。預言者が絶えて久しいイスラエルにおいて、彼らこそ、「忠実で賢い管理人」（四二節）として、御心のなるために期待された。しかしイエスがこの間、神の国の宣教の中で経験せざるをえなかったのは、そうした人々によって火が燃やされてはいなかったということでした。

その神の救いは、いま、ようやく、イエスにおいてはじまったのです。汚れているものが浄められ、神の国の新しい力の胎動は、いまイエスの宣教において、み言葉の教えにおいて、そのいやしのわざにおいてはじまったのです。この神の国の宣教を巡って一方に、これを受け入れた人たち、他方にこれを拒絶した人たちがいました。受け入れた人には、ペトロやレビなど、弟子たちがいます。あるいは自分の僕をいやしてもらった、カファルナウムの異邦人、百人隊長もいます（七・一以下）。イエスに悪霊を追い出していただいた、「何人かの婦人たち」（八・二）もいました。しかし反対に、私どもが、この福音書で、そのはじめから見てきたように、イエスを受け入れず、自らの権威を守るために、イエスを陥れようとしたファリサイ派や律法学者もいたのです。

こうした対立、仲違い、「分裂」が「今から後」（五二節）、一つの家族の中にも起こるとイエスは言うのです。というのも、神に従うことは、人間の自然の絆、家族にも優先して求められることだからです（一四・二六、マルコ三・三五）。福音は人を決断の前に立たせます。「分裂」も、真理が明らかになるためには、あるいは止むをえないことなのではないでしょうか。

2　十字架と神の国

こうしたイエスの受容と拒絶、更には人々の「分裂」も、見方を変えていえば、神の救いの働きが、イエスの宣教において、じじつ前進していることの証しといってもいいのです。

とはいえ、そうした軋轢や人々の対立に、イエスの働きの目標があったのでないことも言うまでもないことです。

イエスの働きの照準は、神の国にあります。神のご支配です。イエスとともに神の国はそこに来ています。そして人々は、福音を信じ、その罪と汚れを浄められて、それにあずかることが許されるのです（マルコ一・一五）。対立も分裂もそこで克服されます。真の平和が実現します。

罪や汚れが浄められて人が神の国に与るのであれば、それは、イエス・キリストの十字架なくして、神の国はない、それに私どもも与ることができないということではないでしょうか。イエスの十字架こそが、罪の赦しこそが、神の国へのただ一つの門なのです。

先ほど読んだ箇所で、まだ触れていないイエスの言葉を、ここで改めて取り上げなければなりません。

しかし、わたしには受けねばならない洗礼（バプテスマ）がある。それが終わる

まで、わたしはどんなに苦しむことだろう（五〇節）。

神の国の宣教のわざをなしつつ、エルサレムへと上るイエス。イエスの思いの中にあったのは十字架でした。

この十字架のことを、イエスは、ここで、「受けねばならない洗礼（バプテスマ）」と言っているのです（マルコ一〇・三八）。

確かにイエスの十字架は、バプテスマでした。バプテスマという言葉は、ご承知のように、「バプティゾー」という言葉がきたものです。その意味は、沐浴とか、水で手を洗うというほかに、基本的には、体を水に沈めることです。それは死を意味します。火ではなく、まさに水によってその身は滅ぼされるのです。もちろんイエスのこの死は、イエスご自身の罪のゆえの死ではありません。それは、他人（ひと）の罪の代価として、差し出されるものです。自らの命と引き換えに、人の命が買い戻されます。それゆえ、それは、贖い（あがない）と呼ばれます。

それは、イエスにとって、まさに「受けねばならない」洗礼です。それは自らの意志で実行したり、回避できるものではありません。神の備えたもう道、その道を御子イエスが従うのです。その服従の道が完成するまで、イエスは苦しみを引き受けなければなりません。

さてイエスが、こうして十字架への道を歩み始めていること、それは、十字架による罪の赦しこそ、神の国の第一歩なのですから、人はそこに神の国の到来を、神の働きを見逃さないようにしなければならなかったのではないでしょうか。

イエスはまた群衆にも言われた。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。また、南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか」（五四～五六節）。

大切なのは、イエスが何をした、何を言ったかということだけではありません。もっと大切なのは、イエスの現れと、その働きそのものに、神の救いのしるしを、救いが近いことを見てとることです。

それをイエスはここで、「今の時を見分ける」という言葉で語っています。イエスが語りかけていた相手は弟子たちだけではない。そこに集まっていた「群衆」に対しも語っていたのです。

イエスの言葉にあるように、西に地中海、南に砂漠の控えているパレスチナは、西の雲で雨を知り、南の風で暑さを知ったようです。とくに西からの急な雨はパレスチナにしばしば洪水をもたらしたと言われています。天気を読み取り、備えることの重要性を彼らは知っていた。それなら、神の国の近いことも、悔い改めの必要なことも彼らは知らなくてはならないのです。

3　時を用いる

しかし、今の時を知る、神の国の到来が近い、火が投ぜられ、汚れが浄められるときが近い、それを知ることは、しかしただ知るだけで終わってならないのです。今の時を知ることは、この今の時を、わずかなこの時を、賢く用いることでもなければなりません。

あなたがたは、何が正しいかを、どうして自分で判断しないのか。あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときには、途中でその人と仲直りするように努めなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官のもとに連れて行き、裁判官は看守に引き渡し、看守は牢に投げ込む。言っておくが、最後の一レプトンを返すまで、決してそこから出ることはできない（五七～五九節）。

ルカによる福音書一二章、この章に入って（考えれば、前の章一一章の後半からそうであったように思いますが）イエスの教えは、群衆を相手にしても、ファリサイ派や律法学者を相手にしても、まして弟子たちに対しても、その教えはみな、世の終わりが念頭におかれたものであったように思います。あの「愚かな金持ちの譬え」のように、個人の終わりも含めて、終わりの来ることを前提に、それを忘れずに私ども生きて行くべきであるというのが、基調になっていたように思います。今日の最後の段落も、その基調は変わりません。

ここも一つの譬えです。詳しくは分からなくても、古代ローマ社会が前提になっています。「あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときには」とあります。おそらく、負債をかかえた人が訴えられたのです。その人への勧めです。途中で仲直りせよ、負債を返すなり何なり、訴えを撤回してもらえるように務めなさいというのです。そのように彼が行動するかどうか、それは分かりませんけれど、イエスは、努力することを求めています。

途中での仲直りを勧める理由に注意したいと思います。簡単にいえば、最後にわれわれを待ち受けているものが厳しいからです。最後のことを知って、いま、どう生きるか、いまどう行動するかということです。

じつは、こうした最後のことを知って、いま何かをするということは、私どもたいていの人はやっていることです。スポーツ選手が、試合に勝つために、禁欲に徹し、よりいっそう高い価値実現を図ることも、その一例だと思います。スポーツは限られた時間ですから、できるかも知れませんが、私どもの人生の場合は、いつも緊張しているわけにもいきません。とはいえ、ともし火だけでなく油も用意していた五人の「賢いおとめたち乙女たち」（マタイ二五章）のようであることはできるように思います。

もう一つ、このイエスの譬えで、私ども注意したいのは、「途中でその人と仲直りする」の、「途中で」ということです。

彼らはもう歩きはじめています。もう出かけているのです。それはどんなに短いつかの間のことでしょうか。しかしこのつかの間のことが、この人の人生を決めるのです。私どもの人生も長いようで短い、つかの間です。人間は「わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎない」（ヤコブ四・一四）残されている時間は多くありません。それをどう使うか、それが問われているのです。

（一・三〇）